

都の華

東京：都新聞社, 1897—1903



図1 1号 (1897年6月2日刊) 令嬢姉妹・春の装い

本誌は、東京市麹町区内幸町1-5 (現、東京都千代田区内幸町) 都新聞社発行の都新聞毎月附録である。「都新聞」は、下町中心の読者層に芸能・娯楽や花柳界の記事を売り物とした「今日新聞」を前身とし、1942 (昭和17) 年の戦時新聞統合の際に「国民新聞」と合併して「東京新聞」となった。発行兼編集人は井上米次郎。本館には、1897 (明治30) 年6月2日発行の1号から1903年11月20日発行の72号までが合本して所蔵される。毎月附録と銘打ちながら、1897年12月、1900年4・12月、1901年4・8・12月、1902年6月の7回は印刷されず、1901年5月は2回刊行されたが号数は通巻される。73号に廃刊の辞はないが、4ページにわたる“流行大観”に総まとめの様相を呈した。

発行の趣意は1号の文頭に、衣食住の流行の有様を示し、その先導を目的とすると記された。衣服門・粧飾門・技芸門・飲食門・園芸門・楽事門・雑事門に分かれ、その工芸美術の意匠・図案等は、専門家の紹介

による。衣服門には衣服・染織 (織物・染物・色・模様)、粧飾門には化粧・髪型・髪飾り・帽子・袋物・はき物・蝙蝠傘・指環・煙管・装飾用玉類等の内容が記載された。

この趣旨は表紙絵に反映され、美人図37件には高尚優美な品格を持つ令嬢から粹な芸妓まで、意匠図23件には美しい新模様・古代模様、40・60号の女髷、3号の避暑案内・旅行の携帯品等に流行の様子が描かれた。図1は、創刊号を飾る表紙絵である。高島田 (右)・稚児髷 (左) の姉妹を描き「春の神」の姿と図解。二人の胸元には、江戸後期、武家婦人の携帯したはこせこ (化粧道具等をコンパクトに納めた紙入) が懐中され、姉の手には三保袋 (手提げ袋) が描かれ、当時の袋物の流行が読み取れる。また、美人図の周囲にきもの・帯の模様を掲げて表紙の美装に効果を上げた。なお、本書収録の口絵も「未来の女装」と題された日本画家、梶田半古 (1870—1917) 筆の表紙絵である。当時の衣服改良において「風俗畫報」(206号 1900年3月10日刊) に男子の改良衣服図が載り、同年7月に流行社刊「流行」にて婦人の衣服改良案が懸賞募集され、半古はその審査員を務めた。翌年1月25日刊同誌に筒袖あんどんに行燈袴の改良服が発表され、同年5月24日刊「都の華」に半古自身のデザインを提示した。さらに、彼は娘二人に改良服を着せて家族写真を撮影したのである (『名画で読む源氏物語：梶田半古・近代日本画の魅力』大修館書店1996)。

ここでは、流行の服飾記事を分類して () に号数を示し、その特色を述べる。今日のきものは、上衣 (きもの・うはぎ)・衣服 (きもの・いふく) と称され、春物 (30・31・41・51・62)・花見

衣 (22・42)、夏物 (1・2・11・12・13・25・26・44・56)、秋物 (15・27・38)、冬物 (6) と季節別に特集された。なかでも呉服店が活気を見せた「浴衣」の動向をみると、1897年当初の様様は中形と小模様 (こがら) の2種で、新形を競い (1)、通人・洒落者の好みを取り上げられた (2)。翌年、中形が東京の一名物として専門の製作家も数多くなり (11)、3年後の中形新模様では本誌の新案が愛好者に好まれ、やがて呉服屋の店先に一異彩を放つとあり、新たに9種を紹介した (32)。1903年には、前年の意匠图案の懸賞募集の結果、ますます中形模様が流行し、地方にも染工場ができた。また、東京の呉服店 (笠仙・三井・大彦・松屋・伏見屋) の意匠比較を示した (66)。図柄に関しては、三井呉服店意匠部の発案として実り稲と光琳水・雪輪を緑松に併せた豊年模様 (16) ・西洋流の夜会に合わせた夜会模様 (16) ・流行の西洋流の小紋 (16) ・夏模様 (46) ・縮緬と中形の模様 (65) が紹介され、1902年には小紋模様 (61) が大流行したのである。次に、洋服は紳士服 (1・2・5・46・70) が記され、パリ流行の襟飾 (2) ・金糸を用いた婦人晴着 (46) も紹介している。婦人服は改良服 (45・69)、子供服はきもの (8) と洋装の先駆けとしての前掛 (12)、1901年2月23日刊表紙絵 (42) には男児のセーラー型子供服が描かれた。これは、子供に陸海軍将校の制服を着せて喜ぶ風による10年後の流行 (『日本洋服沿革史』大阪洋服商同業組合 1930) の先導となった。その後、1903年には子供の洋服姿が多くなると記された (70)。祝着では、1898年に11月15日の行事を子供宮参 (3歳男女髪置、5歳男子袴着、7歳女子帯解) と記して七五三と称さず (16)、2年後には祝月の祝衣 (39) と題して七五三の注文を通じて呉服店 (三井・大丸・松坂屋・高島屋・大彦) の特色を挙げた。1902・3年、七五三の祝着には両親 (59) や母親 (71) の装いも紹介され、特に婦人物ではアール・ヌーヴォー式模様の友禅が流行した。髪型は女髪 (2・4・8・12・13・35・46・60) ・散髪 (5・21・59)、髪飾りは婦人物 (1・2・26・31・39・54)。帽子は紳士用冬物 (6・21) ・夏物 (11)、袋物では煙草入 (1・3・9・39) ・紙幣入と貨幣入 (3・9) ・紙入 (9・39)。蝙蝠傘 (1・3・11) の他、はき物 (7・26・60) が記された。特に指環は、表紙絵の美人たちの薬指に描かれ、創刊号では純金製の換金にふれつつ、彫刻・宝石入・真珠の流行 (1) を述べた。図2は1898年9月16日刊の特集：指環の話 (14) の挿絵1ページであり、全5ページには43図示され、主に西洋の指環の沿革と形状を説明した。

衣服は人の品格に合った装いが第一であること、また高尚な新しいデザインが愛好者から呉服店に影響を与え、呉服店間の競争によるより良い活性化を図ったことが本誌から読み取れる。さらに、内容・挿絵の充実には流行のみならず当代の風俗史料としての価値を見いだすことができる。

(福田博美)



図2 14号 (1898年9月16日刊) 世界各国的指環